

【課題番号：IR12501】

ベトナムと日本を専門職キャリア開発支援でつなぐ
ーナムディン看護大学との包括連携協定を基盤にー
角濱春美¹⁾、鹿内彩子¹⁾、三好美紀¹⁾、久保宣子¹⁾、小野昇平¹⁾、小林昭子¹⁾
1) 青森県立保健大学

Key Words ①ベトナム ②ベトナム看護学生キャリア志向 ③キャリア開発、
④栄養教育

I. はじめに

本研究は、ナムディン看護大学（以下、NDUN）との連携を通じてベトナムの看護・栄養専門職のキャリア形成支援を目的とした以下の3つの研究を行った。

II. 目的

研究1 【ベトナムでの看護キャリア教育の基盤となる基礎調査研究】：来日を希望する看護大学生は日本で看護師として働くキャリアや大学院進学を志向していた。しかし実際には、日本で介護の仕事をした後、看護職としてのキャリアを断念し、帰国後も他分野への就職を選ぶ例が多かった。ベトナムも日本同様、看護師の確保や質の担保が社会課題となっている。個人のキャリア選択の背景には、看護の職業的地位や報酬、祖国への愛着、人生設計など複合的要因がある。そこで、NDUNの卒業年次生に調査を実施し、看護の継続意欲を高めるキャリア教育に必要な要素を明らかにする。

研究2 【来日したベトナム看護人材のキャリア支援の実施と評価】：ベトナムで看護を修め日本で働く人材の日本でのキャリア開発の道筋を事例として検討する。これらのデータの情報提供を行うことでキャリア開発支援を行う。

研究3 【ベトナムにおける栄養専門職整備の基盤となる食育の実施と評価】：NDUNとの共同研究として、現在日本で栄養教諭を中心に実施されている栄養教育(食育)を基に教材開発や教育実践を行ってきた。ベトナムで制度化されていない栄養の専門職の必要性を示す実践研究として、NDUNの要望も踏まえ継続的に実施する。本研究では、現地における栄養士(栄養の専門職者)のニーズについて、関係者へのインタビュー(研究①)と、NDUNと実施し開発した栄養教育教材を用いた介入とその評価(研究②)を行い、学校等への栄養の専門職者の配置に向けた課題を明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究1

1) 対象：NDUN看護学部4年生

2) 調査方法：NDUNの許可と協力を得て、ベトナム語に翻訳した質問紙によるオンライン調査を実施した。

3) 調査内容：(1) 基本属性 (2) 将来の意向 (3) 国際性志向および異文化暴露の環境、SNS利用に関する項目 (4) 職業的アイデンティティ (5) G r i t : G r i t - S

2. 研究2

1) 対象：日本でのキャリア開発に成功したベトナムで看護の課程を修了した者。

2) 調査方法：ネットワークサンプリングにより対象者を集め、本人の許可を得た上で半構造的面接によるインタビュー調査を行った。

3) 調査内容：(1)ベトナムで看護大学に入学した理由、(2)来日した経緯と目的、(3)活用した制度、(4)来日後のキャリアの道筋、(5)今後のキャリアプラン、(6)看護専門職としてのキャリア開発のために求めること

4) 事業内容：ベトナムで普及しているフェイスブックを用いて、日越の医療制度や免許制度、日本でのキャリア開発に資する情報提供、キャリア開発事例の紹介を行った。

3. 研究3

研究① 介入調査：

1) 対象：(1)NDUN の栄養学科の教員、ナムディン市内の小学校児童

2) 調査方法：介入：ベトナム人栄養分野の専門職者(教員)による小学校児童への栄養教育の実施前後の自記式質問紙調査

3) 調査内容：先行研究で作成した栄養教育教材のベトナム人栄養専門職者(教員)による栄養教育の実施(介入)をし、その事前事後での質問紙調査を実施する

4) 分析方法：自記式質問紙調査を先行研究と比較・検討、統計解析を実施する

研究② インタビュー調査

1) 対象：幼稚園・保育所、小学校校長、教育委員会関係者・ヘルスセンター長

2) 調査方法：インタビュー調査：ナムディン市にある対象施設の長に NDUN の研究協力員が半構造化インタビューを実施

3) 調査内容：①園児・児童・保護者・(地域)の健康、栄養に関する課題 ②栄養士を設置する際の課題 ③学校(幼稚園・保育所)で提供する給食に関する課題 ④栄養士に期待すること

4) 分析方法：質的分析(グラウンデッド・セオリー・アプローチ、テキストマイニング(KH coder))

IV. 結果及び考察

1. 研究1

1) 基本属性

研究に参加の同意が得られたのは152名で、その約88%が女性であった。年齢は21~22歳が大半を占めた。居住形態は、友人との下宿や学生寮が約67%を占めた。

2) 将来の意向

進路については85%がすでに決定しており、看護師として就職を希望する者が76%、大学院進学希望者が16%であった。就職場所はベトナム国内が約8割である一方、日本やドイツなど海外での就業を具体的に計画している学生も約2割存在した。海外就業を希望する学生は「10年以上の長期滞在」や「老後まで働く」といった長期的なビジョンを持っているケースが半数を超えた。帰国後も看護師としてベトナムの公立・私立病院で働くことを望んでおり、海外で得た「先進的な医療知識」を自国に還元したいという意欲が高かった。進路に対する不安としては低賃金、次いで身体的・精神的負担が挙げられた。

3) 国際性志向および異文化暴露の環境・SNS利用

学生の多くが学内教育を通じて国際看護や多文化に触れていた。一方、留学など実体験は限定的であった。私生活では海外文化への関心が高く、SNSを通じて日常的に異文化情報や海外で働く看護師のロールモデルに接していた。家族や故郷への献身、経済的安定を重視する価値観が顕著であり、安心できる人的環境を求める傾向が認められた。

4) 職業的アイデンティティ

「看護は社会に貢献できる職業である」「患者に安心を与えたい」といった使命感を示す回答が95%以上に達した。

5) Grit

「一度始めたことはやり遂げる」「努力を継続できる」とする回答が約 96%と高く、勤勉さや忍耐力の自己評価が顕著であった。

2. 研究 2

ネットワークサンプリングにより 12名の研究参加が得られた。来日時の在留資格は EPA (介護)、EPA (看護)、医療 (看護師として就労)、特定技能、留学 (語学) であった。取得資格は、介護福祉士、准看護師、看護師、医療通訳、ケアマネージャーであり、全員が日本語能力 N2 以上であった。現在の職業は、介護福祉士、看護師、大学院生であった。EPA (介護) で来日した者は求められている介護福祉士試験に合格して介護士として就労しながら准看護師の資格を取得した者もあった。また、ベトナムの学生時代に日本の企業から日本語能力と日本の看護師国家試験取得のための学習の援助を受け、来日時にすでに看護師免許を取得している者もあった。ベトナムには介護福祉士にあたる資格が整備されていない。また、看護資格を取得するため 6 か月の無給の研修期間を経る必要がある。このような免許制度の違いが専門職として働き続けるためのバリアになっていると考えられた。しかしながら、対象者個人の学習やキャリアの道を切り開いていきたいという意欲がたいへん高く、個人要因が推進要因になっていた。

それぞれのキャリアの道筋について、個人が特定されないように事例化し、フェイスブックで共有し、情報提供事業を行った。

3. 研究 3

現在、**研究①**については、インタビューが終了し、翻訳作業を実施中である。**研究②**の小学校における栄養専門職者による栄養教育教材を利用した授業実施・評価については介入が遅れており、現在終了間近である。今後、調査①②の結果の取りまとめ・翻訳、分析を進める予定である。

V. 発表

誌上発表

○Harumi Kadohama, Mai Thi Lan Anh, Miki Miyoshi, Saiko Shikanai: Comparison of Competencies and Educational Contents Required for a Bachelor's Degree in Nursing between Japan and Vietnam - Consideration of Collaboration in the Field of Nursing between Nam Dinh University of Nursing and Aomori University of Health and Welfare-, Aomori Journal of Health and Welfare, 7(1), 1-11, 2025.

学会発表

○小林昭子、角濱春美、工藤英明、鹿内彩子、三好美紀、久保宣子：日本での就労を希望するベトナム看護大学生が抱く看護職キャリアを踏まえたキャリアサポート, 2024 年青森県保健医療福祉研究発表会 日本ヒューマンケア科学学会第 17 回学術集会合同集会抄録集, 44, 2024. (優秀ポスター賞 1 位)

○角濱春美、久保宣子、小林昭子、鹿内彩子、三好美紀、尾崎麻理、工藤英明：ベトナムの看護教育課程修了者の来日後のキャリア開発事例の研究, 日本国際看護学会第 9 回学術集会, 2025.